

鏡会 勉強会

番組

令和六年十二月八日 宵の口

湯島天神 参集殿



一、長唄 寿

一、小唄 京の四季 木下 敦子

春は満開の桜と花吹雪の景色と、舞子が侍の真似をしている様子を観やかに。秋は山に囲まれた景色を風が吹き抜け、冬はしんしんと降りはじめた雪と雪見酒。京都の四季をしっかりと踊ります。

一、長唄 岸の柳 内山 由紀江

初夏の隅田川沿い、虹のような兩國橋付近の情景。三味線の音に気を惹かれながらお座敷に向かう、芸を重んじる柳橋芸者を粹に踊ります。長唄でも比較的新しい為、歌詞や曲調に親近感があります。

一、常磐津 屋敷娘 功刀 優衣

大名奥方に努める娘を「屋敷娘」と言う。たまの宿下がりの様子を、恋心から始り芝居見物や毬つきに夢中になったり、蝶を追う娘らしく心が踊る道中を、ふり鼓・二枚扇で華やかに踊ります。

一、長唄 松の緑 宮田 曄子

「松の位の太夫になるべきものの芽生え」という意味が込められ、吉原の禿が芸道の極みに昇れるよう、その門出を祝う御祝儀曲。三味線前弾きに松風の響きを入れ粹な曲調を清らかに踊ります。

一、萩江 八鳥 藤間 加賀美

西行法師が一夜の宿を頼むと、源義経の亡霊が現れ壇ノ浦の合戦を語る。馬に乗り刀での戦い生死の海山。気付くと夜明けとなり関の声は高松の浦風で日差しとともに我に戻る修羅もの。

